

全国厚板シヤリング工業組合

切板の需要動向

(H20. 9. 19)

1. 切断量の推移

(単位:千トン)

	19年度			20年度		
	2Q	3Q	4Q	1Q	2Q	3Q
厚中板	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
無規格	98	99	101	99	100	100
規 格	514	546	546	562	550	560
合計	612	645	648	661	650	660

(出所)実績は全国厚板シヤリング工業組合「鋼板流通調査」結果による。

2. 需要部門別動向

厚板シヤ業界の状況を概観すると、母材需給が一段とひっ迫する中、製造業の一部に弱い動きが出始めるとともに、建設分野においては与信不安が広がっている。

需要面では、7月の諸統計を見ても、建産機分野においては輸出けん引力の減衰が顕著になり、建築関連ではS造の過半を占める中小案件が回復しないまま低調に推移している。

まず機械部門は、全体では概ね堅調を維持しているものの、建設機械、工作機械ともに内需減を輸出がカバーするといった構図が崩れてきており、機械メーカーの生産計画も下方修正を余儀なくされ、機種によっては生産調整に踏み切るケースが増加している。特に、小型建機の落ち込みが目立つ。対照的に大型建機を中心とした鉱山機械はハイレベルの生産活動が続いている。重電分野では原発向けなどエネルギー関連機種が好調に推移。

一方建築関連分野は、従来同様、需要が完全に二極化している。大型建築案件は超高層建築や大型工場建屋を中心に全国的な盛り上りを見せており、大手ファブは来年度上期までの受注量を抱え、ひも付き系建材シヤ各社もフル稼働の状況が続いている。

しかし、一般店売り分野は、各地区とも荷動きが相変わらず低調で、中小ファブ及びシヤの仕事量は依然低位にあり、各社受注確保に奔走している。とくに、メインの中低層建築の出件は少なく、改正建築基準法施行以降、資材高騰、景気の不透明感等も重なって、先細り傾向を強めている。

このように「建築案件の二極化」が進む中、地方ゼネコンなどユーザー倒産が相次いでおり、中小建材系シヤの与信不安はさらに増幅している。また、鉄スクラップ価格の急落が経営圧迫の一因となっている。

一方、母材供給面は、メーカー・ロールのタイト化が一段と強まっており、各シヤは、足元の納期遅延や出荷削減等への対応に追われている。全国のシヤ各社にとって、緊急かつ最大の課題は「材料手当て」である。シヤの仕事は、母材の確保次第で決まるとい

った、異例な事態が続いている。

また、こうした供給制約に加え、価格面においても大幅な値上げ発表が相次いでいる。シャア各社は、今後ともメーカー値上げ分の適正な価格転嫁に努めながら、材料確保に腐心する状況が続きそうである。

なお、シャア業界における主要課題、注目点は以下の通りである。

①紐付きと店売り分野の需要二極化。中小建築シャアの経営動向。

②コンプライアンス対応（独禁法、輸送条件、品質証明問題等）。

とくに、品質証明問題については、本年 3 月より当工業組合内にTFを設け対応策を検討中。鋼構造協会の委員会（官学民の三者で構成）にも参画している。

③与信管理（個社対応）。

④材料手当てと母材値上げ分の転嫁（個社対応）。

⑤資材高騰下における、建築分野の鋼材とコンクリート競合問題。

以上のような情勢下、素材厚板や切板市況の現状については、足元上伸基調で推移しているが、今後も、ロールのタイト化が一段と進むものと予想されることに加え、メーカー値上げ分の転嫁浸透が期待されることや、先高感の台頭等により、更なる市況高騰が予想されている。

なお、主要需要部門の足元の動向を整理すると、概要以下のとおりである。

①橋梁・建築鉄骨の動向

（全 体）

大手建材系シャアは一部でメーカーロール起因により稼働が空くケースがあるものの、各社ともほぼフル稼働が続いている。特にメーカーのデリバリーが悪化しており、8月末の在庫量は近年最低のレベルまで減少している。

今後の動向については、各社とも来年度上期までフル稼働するだけの仕事量を抱えているが、メーカーロールが対応できない可能性が高く、材料起因で稼働に穴が空くケースが出てくる見込み。

（橋 梁）

05年度の指名停止の影響による物件の大量ずれ込みで、06年度上期以降一貫して高水準が継続している。特に大型橋梁が集中した20年度上期は過去最高の生産量になる見込みである。足元FABの仕事量は充分にあり、メーカーロールさえつければ、年度内から来年度上期にかけての仕事は埋まる見込み。しかし、本年度下期から来年度上期にかけてのメーカーロールは一段と厳しくなっており、FABの要望に対しては大幅にカットされるものと予想される。

(鉄 骨)

首都圏の超大型物件は大量にあり、Sファブの手持ち工事量も豊富である。ただし、1～3月におけるゼネコンとFAB間の価格交渉のもつれから、上期の物件発注が遅れ、加工が再度本格化するの9月以降になる見込み。

今後の展開は、首都圏の大型案件の発注本格化、及び輸出を主体とする大手企業の大型設備投資案件の発注開始により、Sファブの稼働は来年度上期一杯は高水準が続く見込み。鉄鋼メーカーも著名案件で、大需要家の工場案件（トヨタ・松下・東芝等）については、ある程度ロールをつける模様。ただし、来年度下期以降は、①大型設備投資案件が来年夏で終了すること、②超高層建築においても、コンクリート化（プレキャスト）が進んでいること、等からきわめて不透明である。強気のFABは来年一杯ないし再来年夏まで超高層案件が続くとみているところもある。

一方、鉄骨需要を下支えしている中小建築案件は全国的に低迷している。計画の見直し、工事の延期や中止、他工法への変更等により、中小FAB向けの物件は少なく、閑散とした状況が続いている。7月の建築着工が改正建築基準法施行前の水準に回復したという統計が発表されたが、中小シャーの仕事量は8月以降も減少している。

②産建機・重電・金属工作機械の動向

(産建機)

全体的には今春以降頭打ち傾向が続いた後、夏場からは生産調整を実施する機種メーカーが増えており、昨年まで続いた全機種にわたる拡大基調に大きな変化が生じている。世界経済の先行き不透明感もあり今後の動向には注意が必要である。

建設機械は、日本建設機械工業会発表の08年度需要予測（金額ベース）の下方修正（+9%→+2%）にみられるように、強気の見通しはここにきて後退している。生産数量ベースでは、昨年からの製品値上げを勘案すると、前年比マイナスに転じているものと見られる。しかし、すべての機種が悪化しているのではなく、住宅建設向けの小型建機の大幅な落ち込みが、全体の足を引っ張っている格好である。逆に絶好調なのは大型建機で、特に鉱山機械（大型ショベル、ダンプトラック）や建設用クレーンは更なる増産計画となっており、暫くは堅調が見込まれる。現下の需要は機種によりまだら模様を鮮明にしている。

(重 電)

重電分野はユーザーにより濃淡はあるものの、仕事量は山積みの高い状態が続いている。特に、送電プラント向け変圧器、遮断機の生産が好調。

また、原発関係は大間原発や米国向け原発物件が来年からスタートする予定で、この部門は世界的な原発建設計画が控えていることもあり、中長期的にみても期待される分野である。

昇降機については、マンション需要の低迷と中国からの鋳物輸入の増加により、大きく

落ち込んでいる。下期も見通しは暗く、今後さらに減少する見込み。

(金属加工・鍛圧機械)

設備投資の先行指標である工作機械受注額（日本工作機械工業会）をみると、7月は全体で前年比7.8%減と2カ月連続マイナス。うち内需は同10.3%減、輸出が7.8%減となった。これまでの内需減を輸出でカバーするという構図が崩れており、下期生産計画において前年比20%減という需要家も出ている。国内向けは自動車業界の設備投資抑制で大きく落ち込み、輸出向けは米国発の景気減速が欧州や新興国にも波及し需要減となっている。

(参考) 切板成品の最終用途（平成19年3月出荷分。厚板シャ工組調べ）

- ・ 建築用： 41%
- ・ 土木用（橋梁等）： 11%
- ・ 産業機械用（建機、金属工作機等）： 27%
- ・ 電気機械用（重電等）： 15%
- ・ 輸送機用（船舶、自動車、鉄道車両）： 6%

以上

全国厚板シヤリング工業組合

シヤー業の厚中板在庫と市況実績推移

(H20. 9. 19)

1. 組合員の厚中板在庫推移(自社所有分)

(単位:千トン)

	19/9末	12月末	20/3末	6月末	9月末	12月末
	(実績)	(実績)	(実績)	(実績)	(事務局想定)	(事務局想定)
在庫量	465	462	438	446	440	430
前期比/量	▲2	▲3	▲25	8	▲6	▲10
前期比/%	99.6	99.4	94.8	101.8	98.7	97.7

シヤーの在庫量は、18年1月の493千トン(在庫率215%)をピークに、以後減少傾向を辿り、同12月末には445千トンまで削減された。19年は5月末の474千トンでピークにその後一進一退を繰り返しながら、45～46万トンのレベルで安定的に推移した。20年に入ってから漸減傾向が続き、在庫率も5月164%、6月159%、7月148%と、14年11月(147%)以来の低水準にまで低下した。今後は、需要堅調、メーカー・ロールのひっ迫、材料入手難等が予想され、在庫水準は、漸減傾向で推移するとみられる。

2. 厚板定尺と切板の市況実績推移

(単位:千円)

	19/6末	9月末	12月末	20/3末	6月末
定尺	81～83	81～83	81～83	114～116	120～122
切板	97～99	97～99	100～102	120～122	135～137

(注)定尺、切板(ガス)は無規ベース、東京

19年年初以降、厚板定尺、切板市況とも、ゼネコンの過当競争による安値受注などから、ほとんど変動がないまま推移。その間、小刻みなメーカー値上げが行われたにも拘らず、転嫁が進まず、一貫して足踏み状態が続いた。19年末頃からは母材価格の大幅値上げを受けて、切板市況も上昇に転じ、その後も上昇している。今後の動向については、メーカー・ロールの一段のタイト化、輸入鋼材の入着減など供給面の制約、先高感から、更なる上伸が予想されている。

以上